

〔史料紹介〕

岩手県立図書館所蔵「御国様御縁組被仰付上使有之御取扱向御調帳」

高橋 博

【解題】

本史料は嘉永五年（一八五二）十二月、盛岡藩の家臣榎山隆翼（たかみ帯刀）の五女国が、藩の命により七戸泰次郎と縁組みをするに当たり、藩から派遣された上使の接待につき備忘のため記されたものである。本文墨付九丁から成り、記主は定かではないが、榎山隆翼のことが「旦那様」と記され、榎山邸における接待が主な内容であるため、同家による備忘録であると思われる。内容は、一丁表から三丁裏までは、十二月七日、登城した榎山隆翼への縁組みの下達、榎山邸における上使の接待の準備・支度について記されている。四丁表から七丁表までは、同邸における前藩主南部利済の上使（中奥小性野辺地札）および藩主南部利剛の上使（中奥小性本堂七五郎）の接待の様子が記されている。七丁裏から九丁裏までは、南部家の大奥から榎山家の奥方に遣わされた女中の接待についてである。

榎山家の当主隆翼は天保八年（一八三七）から加判役（家老）の地位にあった。隆翼の嫡男隆至（後の榎山佐渡）も嘉永六年、部屋住の身ながら加判役となっている。七戸泰次郎は安政三年（一八五六）、「高知」

（上級家臣）の次席の格式を許されている。<sup>①</sup>

折しも盛岡藩は弘化四年（一八四七）に始まった三開伊一揆の渦中にあり、この縁組みの翌年の嘉永六年五月、三浦命助率いる一揆の領民は仙台藩に逃散し、盛岡藩主の更迭など四十九ヶ条の要求を仙台藩主に願い出た。六月、盛岡藩は家老五名の連署により仙台藩に領民の引き渡しを求めたが、榎山隆翼はこの連署に名を連ねていた。<sup>②</sup>要するに、この縁組みは当時盛岡藩の上級家臣の地位にあった両家の間に結ばれたものであるが、同藩がこの時期限界に達していた領民支配の打開策の一環として、両家の紐帯の強化を企図していたかは定かではない。

註

- （1）両家については、前沢隆重他編『参考諸家系図』第一卷（国書刊行会、一九八四年）、太田俊穂編『榎山佐渡のすべて』（新人物往来社、一九八五年）、岩手県立図書館編『岩手史叢 第五卷 内史略（5）』（岩手県文化財愛護協会、一九七五年）に拠る。
- （2）前掲太田俊穂編『榎山佐渡のすべて』。

【凡例】

一、本史料は、岩手県立図書館所蔵「御国様御縁組被仰付上使有之御取扱向御調帳」(新二八―八五)の翻刻である。

一、翻刻に際し、読解の便をはかるため、次のような校訂方針を採った。

- 1 文中に読点・並列点を便宜加えた。
- 2 底本にある平出・闕字は原則として行わなかった。
- 3 漢字は原則として常用漢字を用いた。
- 4 当て字・誤字などは、そのままとした。
- 5 校訂注は、底本の文字に関するものは「」、参考又は説明のためのは( )で括った。
- 6 底本の丁替りは、各丁表裏の終りに「」を付して示し、その表裏の始めに当たる部分の行頭に、丁付け及び表裏を(1オ)(1ウ)の如く示した。

【翻刻】

(表紙欠)

(1オ) 嘉永五年子ノ十二月六日

(印) 「新渡戸文庫」

一、南部土佐様より組頭久保田才兵衛殿を以御退出後被仰越候趣ハ、御用有之ニ付、明七日上下二而登城可被致旨御達之旨御同人被仰上之、

同七日

一、旦那様今日御用召ニ付、御上下二而御登城被遊御蒙左之通、

檀山帶刀(金裏)

南部泰次郎江娘国縁組被仰付、

十二月七日

(1ウ) 右之通御蒙被遊候旨、御退出前殿組頭梅村徳兵衛殿より申参候処二而、御中ノ丸江御献上左之通、

御目録添二而、

一、釣鯛一折、

但、懸り台二而、

右者乗台二而御献上乗台持候小者式人、年頭御足輕彦人二而、

御献上御使者

沢田六郎磨

箱取彦人

右之通御中ノ丸江持参、梅村徳兵衛殿江御願申候而、御献上二相成候、尤御目録者徳兵衛江御願申候而差上ル、

(2オ)

一、奥御物書赤藤純作殿より御役人江申来候ハ、其御屋敷江今日上使被遣候御模様御座候間、御内々為御知申候旨申遣候、右ニ付手続左之通、

(橋山邸)

通、

一、御門前江師桶(桶)三ツ組桶ニ致、左右江差出置候事、

但、御門前江御同心式人棒為持左右江差置候事、尤袴羽織大小ニて相勤之、

舛蔵

差蔵

一、御門開閉御同心式人附置候事、

但、袴・羽織・脇指斗ニ而御門内江附置候、右兩人(義)せん足為相用  
候事 相勤之、鑓一本

一、奥江一番遠見附置、二番遠見綱御門見張御番所前江附置、上使御出  
之処見届、御玄関江注進有之事、

(2ウ)二番遠見注進之節、御側江申上之、  
一、御鑓懸之間西番三人、

下着用并脇指相用い候、

田沢多喜八  
栗谷川富弥

永田長右衛門

但、御鑓懸後ニいたし中程一折二居、上使御入御移り共ニ拝伏仕  
候事、

一、御玄関御白砂左右江六人、

御庭ノ方、野崎八右衛門

袈谷縫右エ門

川内進之丞

但、右人数御側江三人ツ、罷出、上使之御入之節并御帰り共ニ拝  
伏仕候事、

御中ノ方、藤田源吾

高橋重作

刈屋虎作

右ハ何連も脇指斗ニ而御玄関脇よりせん足相用御事、

(3才)

一、御玄関御敷出し前御白砂江薄辺り三放続ニ致敷置候事、

一、御中ノ口境御仕切江御小者式人附置候旨、上使御入之節、切候事、

一、御玄関御發出、左右の御親類中様御兩人御差出、上使御入之節御帰  
り共々御会釈有之事、

右御兩人様熨斗目上下御着用、

石塚三次右衛門様

榎山忠左衛門様

一、御刀番之者御鑓懸之間より入口御広座敷御襖際ニ扣居、御刀をき直  
々御詰候、引続参り御着座ニ成候ハゞ、御刀掛江預け置候、直ニ引  
下り元座ニ扣居、上使御入之節、且那樣御出迎直ニ御先立御通被  
遊、

(3ウ)上意被仰蒙御引下り被遊候処ニ而、御火鉢・御煙草盆差上御菓子差

上御断ニ而、直ニ相下り御茶差上同様御断ニ而、直ニ相下ケ夫より

御請仕兩人罷出、御火鉢・御煙草盆相下ケ候処ニ而、且那樣御請被

仰上済候処ニ而、御次之間御敷居際ニ御扣被遊候処ニ而、御刀番之

者御書院御敷居前ニ而拝伏仕候旨、上使御引取御模様之節、御刀持

参御広座敷ニ扣居御詰候、引続御玄関鏡板之処より御先立御敷台ニ

而御刀上ル、且那樣御先立被遊候事、尤若且那樣御同様御先立被遊

候事、右之通御手續仕居候事、

(4才)

一、御側目付より申来左之通、

其御許江従少将様上使中奥御小性野辺地糺最早被遣候、此段為御知

申候、以上、

十二月七日

榎山帶刀様・奥瀬泰五郎

右御挨拶左之通、御紙面之趣致承知候、以上、

十二月七日

(4ウ) 奥瀬泰五郎様・(座敷) 榎山帯刀

右之通御挨拶相認め、御状箱御通被成候処之旨、上使御出ニ相成候事、

一、上使御入前、御肴一折乗台ニ而参候事、

右請取人、

北向官右衛門

袈岩熊太郎

右ハ御玄閑御敷台所へ薄<sup>(縁)</sup>辺り三枚敷にて処へ罷出、北向官エ門請取、袈岩熊太郎御肴台持参、御書院御床之間より御座敷之御肴台へ写しニ而直ニ上候事、

但、御床師無之、

(5才) 前御肴持参之者御酒代被下候、年頭上下着用、参り候者へ三百疋被下候、小者共へハ弐百疋ツ、

尤御中ノ口へ相廻し候処ニ而候故、右被下物沢田茂左エ衛門承之、

一、二処遠見注進之節申上ル、

(榎山・奥瀬) 御二方様御門内通路限御出迎御先立被遊候事、

但、御役所へ御門外通路限之合観之处、御役中ニ付、内通路限御

出迎遊候事、

一、上使御入、

(榎山・奥瀬) 御二方様御出迎直ニ御先立御書院江御通、御敷居際ニ而御会釈被

(5ウ) 遊、上使御着座ニ而是候迄被仰候処ニ而御敷居内へ御入、上意御

蒙御床之間へ上ヶ置候御肴御頂ギ、直ニ御引下、夫より三方長御熨

斗被差上、直ニ御引下被遊候、是より御請取、

一、御火鉢上ル、

大泉半七様

一、三ツ御煙草盆上ル、

関 覚様

御廻被成、

一、御菓子上ル、

沢田広志

但、際付御小砂鉢、尤紙不敷、御八寸ニて、杉<sup>(苗足)</sup>よせたし

ニ付上ル、御断ニ而直ニ下ル、

一、御茶上ル、

沢田重太郎

(6才) 前御同様御断ニ而、直ニ下ル、

夫より御詰の兩人罷上り、御火鉢・御煙草盆相下、右相済候処ニ而、

旦那様御請被仰上、御敷居際江御引下り被遊候処ニ而、御刀番御敷居前ニ而拝伏仕罷上り、御刀ヲ持、御広座敷へ引下扣居、上使御立之節御跡江引続参り御玄閑鏡板之处より御先ニ立御発台ニ而上ル、御二方様御先立御門内通路限御見送被遊候、上使御手扣左

之通、

(6ウ) 榎山帯刀

(七戸) 南部泰次郎江娘国、縁組就被仰付候被成、御祝御肴一折被下、

一、御側目付より左之通申来也、

(南部利昭) 其御許江従太守様上使中奥小性本堂七五郎最早被遣候、此段為御知申上候、以上、

十二月七日

(座敷) 榎山帯刀様・奥瀬泰五郎

右御挨拶前御目錄被仰遣候、

(7才)

一、上使御入前、御肴一折乗台ニ而参り、右請取方前同断手續之通、

但、御肴年頭并乗台持御小者共江被下方前同断被下候、

一、上使御入、

中奥御小性、本堂七五郎殿

御二方様前御同様被遊、外御取扱向共ニ同断上意御蒙前同断、上使

(橋山・奥座)  
御定御取扱向前同断相済、

一、旦那様直ニ御登城被遊、御請取仰上御退出被遊候、右之通相済、」

(7ウ) 畢而、

一、大奥より御書を以、奥様江被仰越候者、今日其御許江女中御使御出被遊候旨申参也、右ニ付御手續左之通、

一、御女中御使御出前御肴四折参り、瀬川罷出候、内御預置下渡ニ而申参り、則奥江差上置候、

一、御女中御使御入之節大御門開候事、表御門内より刈屋虎作上下着用、御先立仕御参口前ニ而拝伏仕候事、

一、御末御玄関前之左右江上下着用ニ而兩人ツ、被出拝伏仕候、御駕籠揣候小者袴為着御錠口迄御駕籠入置、引取御縁江引下御様子たる御事、」

(8才)

一、瀬川さま御入之節御鍵口より御次迄御女中頭御先立仕御事、奥様・

御新造様御次江御出迎被遊、御会釈直ニ御先立上之御前江御通被遊、御使御口上之御旨御伺被遊、直ニ御引下り、

一、三方長御熨斗被差上、直ニ御下ケ、夫より御女中御菓子上ル、御茶上ル、右相下ケ直ニ引続御吸物御酒差上ル、

一、御吸物、

一、御肴三種、

御附添御女中御末耆人余り、同人よりハ御次ニ而御酒・御吸物被下候、御菓子被下候、」

(8ウ)

但、若党式人・随人四人・茶取被下方為御酒代若党江三百疋ツ

、御小者へ式百疋ツ、被下候、

一、瀬川さま御帰りの節御出之通、御末御玄関前ニ左右式人ツ、罷出、拝伏御同所より表御門迄刈屋虎作御先立仕候、御門番式人附置、大御門開候事、

一、御頂戴御肴左之通、

一、(空きママ、以下三ヶ条も同じ)

右之通、」

(9才)

一、御請岩泉彦左衛門様を以、御附役迄被仰上候事、

以上、

一、泰次郎様より御樽一荷・御肴一折被遣候、

但、乗台ニ而御玄関より参ル、

御使者、茶地勘兵衛殿

右御使者参り候節、大御門ひらき候事、御樽肴請取掛りハ小者式人袴為着置候事、御使者先立沢田茂左衛門御使者之間

へ通、御口上之趣承之、御樽肴共ニ同人直ニ差上、御口上申上ル、

一、旦那様於御書院御使者江御逢御挨拶被遊、直ニ御使者引取御使者之間江通、御酒・御吸物被下候、」

(9ウ)

一、御吸物、

一、御肴三種、

右相済御使者被帰候、

一、北御方様より泰次郎様より御樽肴被為進候、

一、御肴鯛一折、

一、御樽一荷、

但、乗台ニ而年頭御足輕壺人・御小者式人、

御使者、北向官右衛門

若党壺人

箱取壺人

(たかはし・ひろし 宮内庁書陵部研究員)